

この心如来となる

お釈迦様（ブツダ）のさとり道

釈尊 出家への告白

釈尊の出家は、すべての縁を断ち切ったものではない。どうしたら最上の結果があらわれていくのか求道である。求道たるには、尊敬できる師が必要である。師は、釈尊の考えである。釈尊の求道たる考えは、1、国はいつ滅亡するかわからない。お互いに武器を持ってインドのそれぞれ各地の争っている。平和なる国づくりはできないだろうか。

1、生老病死、雑染憂苦は、苦であり、苦を嫌っている人々が、苦を招いているものを知れば、対処でき、また、予防できる。

苦は聖なる願望であり、苦はこの身を忍土に苦に耐えれば明日ひらく教えに導いてくれる。

苦は単なる苦ではなく、この身を育ててくれる護持養育である。

釈尊は

和歌（無上等正覚）

漢訳 anutara samma sambodhi 阿耨多羅三藐三菩提

無上等正覚は、絶対者に服従（したがえ）とか、わからなくても先ず信ぜよと言つのではない。幸福にするのではなく、幸福にさせずにはおかないお

慈悲の教えなる聖願がある。そのお慈悲なる教えにあつてはいる。

この法の身にわが身を照らし重ねる。必ず誰もが等しくわかる。釈尊は、この法を広めるために尊敬の最初の求道の1つは、お互いに尊敬しあう作法・合掌・礼拝の中に身を投じたのである。物事を説くには、相手の話もきちんと聞かないとこちらの言うことを聞いてもらえないものである。

当時インドでは、苦行に耐えることが自分の煩惱を出さないようにすることであるとされていた。

釈尊も又、その教えを説く師の所に行かざる求道の心だった。釈尊の求道をみきわめるために二人の師について、苦行の道に入った。

語句説明

・無上等正覚

この上の無い、すべての人に等しい、ほんとう（まこと）の目覚め

・等正覚者

すべての人に等しい、本当の目覚めに目覚めた人

親鸞の言葉

涅槃界というは、無明のまどいをひるがえして無上覚をさとするなり。

至心信樂願為因というは、阿弥陀如来回向の真実信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。 尊号真像銘文より

釈尊のお言葉（聖求経パーリ語原文より）

So kho aham bhikkhave aparena samayena daharo
ソー クホー アハム ビックハベー アパレーナ サマイエーナ ダハロー
その 私は 比丘らよ 後に 機会に 者者に
va samāno susu kāḷakeso bhadrena yobbanena
バ サマーノ スス カーラケーソー バッドレーナ ヨーバネーナ
有しつ つ 漆黒の髪 幸福 青春
samannagāto paṭhamena vayasa akāmakānam
サマナーガートー パタメーナ バヤサ アカーマカーナム
満ちた 最初の 青春(人生の春) 欲せざる
mātāpitunnam assu-mukhānam rdantāmaṃ
マーターピチュナム アスス ムカーナム ルダンターナム
父母の 涙 顔 嘆きつ つ
kesamāssuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādeevā
ケーサマースム オーハーレートパー カーサーヤーニ バッターニ アッチャーデーパー
髪と髭を 剃って 袈裟衣(黄衣) 着て
āgārasmā anagariyam pabbajim
アーガースマー アナガリヤム パッパジム
在家から 家なき 出家者となった

その私は、実に、比丘等よ、その後の機会に、漆黒の髪を有する若者で、幸福と青春に満ちた人生の春に、それを欲しない父母の涙をして欺くのに、髪と髭を剃り、袈裟衣を着て、在家から家なき出家者となった。



無上等正覚の声の誘い
春が来た。里に來た
法、法華経。冬を耐えたひとには、
新しい感動の道がひらける。仏法の
声こそ、必ず信樂なる道が与え
られる。まず法を聞いて
ください。自分の力
ラにとじこもつ
ていると、
苦の我

欲だけしか出てこない。
花が咲き、鳥が鳴く。さあ、この
身に向けられたお慈悲の陽光を受け
て、一度しかない人生を命がけて歩
んでください。三寶寺は、待つてい
ます。
無上等正覚の声
・私のこの身に願いがかけられている
ことがよくわかりました。
・おきている時も、食べている時も、
お風呂に入っている時も、願われて生か
されていることを忘れられません。